



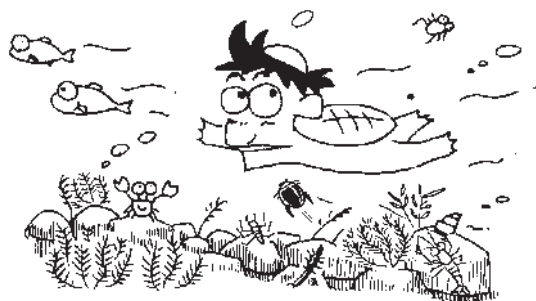
川にはどのような生き物が すんでいますか？

川には、河口部から上流部までいろいろな環境が見られます。そしてそれぞれの環境には、魚類、両生類、は虫類、鳥類、哺乳類、昆虫類など大きさも生活様式もばらばらのさまざまな生き物がすんでおり、川の生態系ができあがっています。

川のなかには、アユ、イワナなどの魚類が見られます。さらに川の底や川岸、ワンド、河原や草地にはいろいろな生き物を見ることができます。川底の石にはカゲロウ、トビケラなど昆虫類の幼虫がはいまわり、石の表面には生物の実験でよく使うプラナリアや珪藻、緑藻などの藻類、それらについているゾウリムシなど微細な生物も見られます。また、川岸やワンドなどの水辺には、スジエビなどの甲殻類や、ゲンゴロウやアメンボなどの昆虫類、カエル類も見られ、岸辺の草の根元は小魚の隠れ家となっています。そして、これらの小さな生き物を餌とする、コサギやアオサギ、タヌキなども見られますし、冬になると渡り鳥のカモ類の越冬する姿を見ることができるようになります。

これらの生き物は、それぞれ食物連鎖しょくもつれんさに基づいて川の生態系を構成しています。たとえば、川のなかでは、石につく藻類を水生昆虫が食べ、水生昆虫をモツゴやオイカワなどの魚が食べ、魚をコアジサシやカワウなどの鳥が食べます。このように川に見られる生き物は、小さいものから大きなものまでいろいろな種類が、「食べる」「食べられる」などのさまざまな関係をもって複雑につながっています。

川の生態系に見られる生き物は、川や河原で一生涯その一部を過ごします。魚や魚の餌となっている小さな生き物は一生のほとんどを川のなかで



すごしますが、鳥や哺乳類などは川へのかかわり方はさまざまです。鳥だけを見ても、カモ類やカメ類など生活のほとんどを水域ですごす種類や、カワセミやサギ類など川にはおもに餌をとりに来る種類、河原の草地で繁殖するオオヨシキリや餌をとるカワラヒワなど、その種類もさまざまです。哺乳類では、カヤネズミは河原の草地で巣づくりをしますし、キツネなどは河原を広く生活の場として使います。

昆虫類では、カワラハンミョウやカワラバッタなど「カワラ」の名がついたものだけでなく、河原に生育する植物を餌とする種類など、河原でしか見ることができない種類もたくさんいます。このような種類は河原が大変重要な生息環境となっているため、そこでの環境が変わっていくことにより、全国的に数を減らしています。

日本は、南北に長くたくさんの川があります。たとえば北海道の川と沖縄の川とでは、気候や川の成り立ちの違いにより生息する生き物はまったくといってよいほど異なり、日本の生物多様性を支えています。

しかし近年は、北海道の川にはウチダザリガニやブラントラウト、本州の川にはピラニアやブラックバス、ブルーギル、アメリカザリガニ、ウシガエルなどの日本に生息していなかった外来種が多く確認されるようになりました。このような外来種の侵入・分布拡大は、川の生態系に大きな影響を与え、日本の生物多様性の危機をまねく原因のひとつとなっています。外来種のほとんどは、私たち人間がさまざまな経緯でもち込んだものです。これからは、外来種を飼ったり放したりしないなど、一人ひとりの行動が日本の川の生き物を守っていくためにも重要となります。